慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『浦島太郎』奈良絵 解題・影印
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.49 (2009. 6) ,p.65- 66
JaLC DOI	10.14991/002.20090600-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20090600-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『浦島太郎』奈良絵　解題・影印

石川　透

解題

ここに紹介する『浦島太郎』奈良絵の断簡は、たった一枚の絵であるが、とても興味深い絵である。

『浦島太郎』については、今日の誰もが知る話であるが、現代人の多くは、浦島太郎が玉手箱を開けて、あっという間におじいさんになってしまった、で終わりであると思っている。しかし、御伽草子の『浦島太郎』を見れば分かるように、その後、浦島太郎は神社に、すなわち、神として祀られるのである。そこにおいて、はじめてめでたしめでたしとなるのである。

その御伽草子の『浦島太郎』のうち、御伽文庫本には、はっきりと、以下のように書かれているのである。

此箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。是を見れば二十四五の齢も、忽ちにかはりはてにける。扨浦嶋は鶴になりて、虚空に飛び上りける。そもそも此浦嶋が年を、龜がはからひとして、箱の中にたゝみ入（れ）にけり。さてこそ七百年の齢を保ちける。あけて見るなと有（り）しを、あけにけるこそ由なけれ。

君にあふ夜は浦嶋が玉手箱あけてくやしきわが涙かな

と哥にもよまれてこそ候へ。生有（る）物、いづれも情を知らぬといふことなし。いはんや人間の身として、恩をみて恩を知（ら）ぬは、木石にたとへたり。情深き夫婦は、二世の契と申（す）が、寔（まことに）有（り）がたき事共かな。浦島は鶴になり、蓬莱の山にあひをなす。龜甲に三せきのいわゐをそなへ、万代を經しと也。扨こそめでたき様（ためし）にも、鶴龜をこそ申（し）候へ。（『日本古典文学大系・御伽草子』）

浦島太郎は鶴になる、今日言う乙姫様は、御伽草子ではもともと亀であるから、ここにおいて、鶴亀のめでたい物語となるのである。

しかしながら、『浦島太郎』の絵を見る限りでは、玉手箱を開けてすぐに鶴が描かれるのは珍しい。御伽文庫本では、玉手箱を開ける場面の次の絵に鶴と亀が描かれ、物語を終えている。それ以外では、神社が描かれて終わるものが多いのである。

それがこの一枚の絵には、浦島太郎が玉手箱を開けるとともに、その上には鶴が飛んでいるのである。本文をともなっていないの

で、確定はできないが、御伽文庫本を素直に絵画化すれば、このようになるのであろう。

なお、本書の書誌は以下の通りである。

所蔵、架蔵
形態、奈良絵本、断簡一枚
時代、[江戸前期]写
寸法、縦二三・六糎、横二〇・五糎
料紙、斐紙
本文、なし
奥書、なし